

細胞診のベーシックサイエンスと臨床の実際

坂本穆彦(編)

つくば臨床検査教育・研究センター理事長

小松京子

細胞診断の力量のさらなる STEP UP をめざして

『細胞診のベーシックサイエンスと臨床病理』が発行されたのは1995年である。細胞像から診断を推定するアトラスとは異なり、科学的な視点に基づく他にはないタイプの本であり、長きにわたり愛用した、待望のリニューアル版である本書はさらに進化し、時代に即した内容となっている。

第1章では基礎知識である分子生物学や遺伝子関連の知識はもとより、がん化のメカニズム・遺伝性腫瘍・腫瘍免疫など、多くの細胞診の教本にはあまり詳細に書かれていないところが丁寧に解説されている。ゲノム医療に関する第2章は最新情報満載で、NGS・がんゲノムプロファイリング・分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬・がんゲノム医療に関する事項・ゲノム診療における細胞診検体の取り扱いなどがエキスパートによってわかりやすく解説されている。がん遺伝子検査の精度管理や遺伝子パネル検査の現状などは、臨床現場にとって非常に重要な事項である。さらなる進化を遂げる領域であり、病理細胞診領域にも深く関わる分野である。

領域ごとに解説されている第3章では、病理組織分類だけでなく、疫学や治療、超音波や内視鏡画像の解説が掲載されており、細胞診断を行うにあたり非常に有用な知識を得ることができる。アトラス的な教本は多く存在するが、それとは全く異なるテイストの著書であり、細胞診に関連した幅

広い学習のために活用していただけると確信する。

第4章で解説されているAIの応用・自動スクリーニング・テレサイトロジーなどは実施されていない施設も多くあると思うが、医療DXが推奨されている現在、さらなる進化が期待され、施設への応用がなされていくと考える。既にテレサイトロジーは、細胞診の研修会などでも利用されている。また、「デジタル病理画像」関連の保険収載が可能であるため、実施する施設も増加するであろう。

これら全ての情報は、色々な書籍から探してまとめていたが、一冊で学習できることに感激している。コンパニオン診断薬は増加していき、遺伝子情報も進化する。他にはない貴重な本書が適宜改訂され、継続的に発刊されていくことを切望する。著者は病理細胞診ならびに遺伝子領域で活躍中のご高名な先生方ばかりである。本書を活用し、最新の幅広い知識を得て、細胞診断の力量の更なるSTEP UPをめざしていただければ幸いである。



●B5/頁 264/2024 年
定価：11,000 円
(本体 10,000 円＋税 10%)
[ISBN978-4-260-05587-1]
医学書院 刊